

4-P-2

市販鶏肉における ESBL 産生大腸菌の分離頻度と分子遺伝学的特徴

三浦真希子¹⁾澤村 暢¹⁾ 木下承皓²⁾

【目的】近年、Extended-spectrum β -lactamase (ESBL) 産生大腸菌の拡散が社会問題となっており、その原因の 1 つとして畜産食品からの伝播が考えられている。本研究では、市販鶏肉由来 ESBL 産生大腸菌の保有率調査及び分子遺伝学的特徴を解析し、食品を介したヒトへの伝播について考察することを目的とした。

【材料と方法】国内の市販鶏肉 27 検体を破碎後、クロモアガーESBL に塗布し、発育した菌について菌種の同定及び薬剤感受性試験を行うと共に、ESBL 及びカルバペネマーゼ産生遺伝子の検出、及びプラスミド性 AmpC 確認のためボロン酸試験 (DDST) を実施した。

【結果と考察】21 検体中 3 検体 (14%) から 4 株の ESBL 産生遺伝子を持つ腸内細菌が検出された。その内訳は、CTX-M-1group (大腸菌) が 1 株、TEM+AmpC (菌種同定不可) が 2 株、TEM (菌種同定不可) が 2 株であった。今回、ESBL 産生遺伝子保有率が低く、菌種にもばらつきがあったため、疫学解析は困難であった。2015 に年世界保健機関 (WHO) 総会で「薬剤耐性 (AMR) に関するグローバル・アクション・プラン」が採択されたことを受け、日本政府は適切な薬剤使用を徹底するための国民運動を展開しており、その対策が影響していることが示唆された。

1) 保健科学部医療検査学科 2) 神戸大学